
立て、マト！お前がやらねば誰かがやるだろうよ！

虎刈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立て、マト！お前がやらねば誰かがやるだろうよ！

【Nコード】

N9151I

【作者名】

虎刈

【あらすじ】

マトリョーシカは、時空管理局第三課のエージェントである。

時空管理局はみんなの過去や未来を守る、正義の組織である。

マトリョーシカは、何か色々と酷い目に遭いつつ任務を遂行しているのだ！

拙作のトンデモ短編「立て、ルッピョロ！お前がやらねば誰がやる！！」の続編。

マト「いいか、お前らしいめるなよ！いじめるな！絶対にいじめる

なよ！」

虎刈「嫌です」

第一話「俺をいじめて楽しいんですか!?!」 (前書き)

マト「もうね、俺が主人公だって聞かされた時から、嫌な予感はしてたんですよ。前作でも中年にケツを掘られたし、今回もロクな目に遭わないのが分かりきってました。……あぁー、ババ引いた……クソアツ!!」

第一話「俺をいじめて楽しいんですか!？」

休暇を終え、俺、マトリョーシカはルッピョロ先輩と共に久々の時空管理局へと出勤した。

時空管理局員はあらゆる次元の過去や未来を守る事を仕事として
いる。中でも俺達が所属している第三課は特殊な部類で、その時代
の人々に気付かれないうっそり未来を修正する事が主な任務な
のだ。具体的には、体を張って勇者と共に魔王を倒したり、体を張
って首脳陣を愛人関係にしたりと……。

うう、ロクな任務がない。思い出ただけで泣きたくなってきた。
「――どうした、マト。久しぶりの職場で、落ち着かないか？」

そんな俺を優しく気遣ってくれる、ルッピョロ先輩。

ルッピョロ先輩は、素敵な女性だ。男口調で気も荒いが、その分
責任感が強く行動力に溢れている。それに何より美人で、実はグラ
マーだったりもする。本人は男らしくあろうと、その事を気にか
けているみたいだけど……そんなところもひっくるめて、俺は先輩が
大好きだ。

この間の任務で、晴れて俺達は恋人同士になれた。中年にケツを
掘られるという致命的な精神的^{トラウマ}外傷も負ったけど、先輩と結ばれた
のなら怪我の功名と笑っていられる。

……でもまあ、恋人同士と言っても、まだ手を繋いだくらいでキ
スすらしていないんだけど。案外、先輩って奥手みたいだし。い
ずれ、深い仲になりたいなあ……。

「……マト? 聞いてるのか? ひょっとして、まだ体調が悪か
たりするのかな?」

――やばっ、考え事に没頭していた。

気が付けば、先輩が心配そうに俺の顔を覗きこんでいた。

「い、いえ! そんな事ありませんよ。先輩が一緒なら、どんな時
でもやる気は出ますって!」

「……そうだな。期待している」

心なしか、先輩の頬が朱に染まった。

——くああっ、もう可愛すぎる！ 反則ですよそれは！？

思わず俺が先輩を抱き締めようとする、いつの間にかするりとかわされていた。

「行くぞ、まずはヤーヴェ課長にご挨拶だ」

「はい……」

抱擁がかわされ、つい、しゅんとしてしまう。

そんな俺に、先輩が苦笑しつつこっそり耳打ちした。

「馬鹿野郎。そういう事は、任務後にプライベートで……だ」

「——は、はいっ！！」

こういったフォローもしてくれるんだから、やっぱり俺は先輩が大好きだー！！

俺達の眼前にいるヤーヴェルツリイ課長は、いつものようにくたびれた様子で書類に目を通していた。

いつも思うんだけど、この人が三十代前半って絶対嘘だろう……。以前そんな事を先輩に話したら、「課長本人には言うなよ。あれでも気になさってるんだ」と言われたけども。

そんな課長は、俺達へにっこりと笑いかけた。中間管理職のような冴えない笑みだったけど、あれで俺達第三課のトップなんだからなあ……。

「やあ、ルツピヨロ君、マトリヨシカ君。いつもご苦勞様。特にマトリヨシカ君は休暇を取っていたけど、体の方はもう大丈夫なのかかな？」

心の底から心配そうに、課長は俺の顔色を窺う。

……やっぱり、この人は苦勞性の善人だよなあ。上司なら、もっと威厳を持って接してもいいのに。

俺は課長を安心させるべく、胸を張って答えた。

「もちろんですよ！ 色々ありました、俺は今日も元氣です！！」

それを聞いた課長はうんうんと頷き、話を続けた。

「それは良かった。これで、安心して今回の任務の説明に移れるものだね。……さて、今回の次元は第五正弦位相体の $\delta 14$ 、時代は太陽暦 $0 \times \times \times$ 年。まあ、ちよつと特殊な時代だね。……ルッピヨロ君、覚えてる？」

俺は次元名や時代を言われてもすぐには分からなかったが、先輩は即答した。

「確か、チヨレジョ人とチュケツパミュ人が争っている時代でしたか。結局はチュケツパミュ人が戦争に勝利し、チヨレジョ人は駆逐され歴史から姿を消したと記憶しておりますが」

「その通り、流石ルッピヨロ君。君の記憶力は凄いねえ」

「その言葉は以前にも聞きました。自分への評価はいいので、先をお願いします」

いや、俺も普通に凄いと思うんだけど。先輩ったら謙虚なんだから。

ヤーヴェ課長は話を戻した。

「ええと、その二種族の戦争に関してだ。二課の計算によると、そもそもその歴史は間違いらしいという重大な発表があった」

「……と、申しますと？」

「本来、戦争で勝つべきはチヨレジョ人であるべきだそうだ。けどそれが何らかの原因でチュケツパミュ人が戦争に勝利し、世界を牛耳ったせいでいつもあそこの次元は早い段階で終末を迎えるらしい。つまりだ、君達の任務は戦争でチヨレジョ人を勝たせ、歴史を大きく変える事なんだ」

……何というか、今回の任務はいつものセコい物と違い、壮大だなあ。ここまで派手に歴史を変える機会は、初めてだ。

案の定、ルッピヨロ先輩が課長に疑問を投げかけた。

「課長、それは歴史の大きな改竄ですが、時空管理法に抵触しないのですか？」

「その点は問題ないよ。審査委員会にも打診を取ってみたけども、

そもそも現在認知されてる『チュケツパミュ人が勝つ』歴史の方が歪んだ未来だと、確たる判決も下りてるんだ。歴史の改竄ではなく矯正なので、時空管理法には抵触せず、私達第三課にお株が回ってきたというわけさ」

「チヨレジョ人を戦争に勝利させる、との事ですが、彼らの文化レベルはどこまで向上が許されていますか？」

「本来、私達時空管理局員がその時代の人達と接触を図るのはまずいんだけど……今回は規模が規模だし、全くの無接触というわけにもいかないだろうね。あの時代の文化レベルはC3……発達した武器は精々、剣や弓矢くらいだから、それぐらいに抑えれば大丈夫でしょ。間違っても近代兵器とか渡したり、使用しちゃダメだからね？ あくまでも戦争にチヨレジョ人を『勝たせる』であって、君達が勝つわけじゃないんだから」

「了解です。……しかし、難しいですね」

「だから、君達にしか任せられないんだよ。……期待、してるからね？」

第三課での、俺達の評価は高い。

ここまで期待されて、意気を感じなきゃ男がすたるってもんだ！

「ドーンと、大船に乗ったつもりで任せてくださいよ、課長！」

「うんうん、頼もしいね。……あ、そうだ。一つ、大事な事を忘れていた」

課長が、少し困った顔をして告げる。

「次元転送システムが、どうも最近不調らしいんだ。今日の午後一時から本格的なメンテナンスに入るんだけど、そうすると当分……一週間くらい、使えなくなるらしい。時空って生モノだから、所定の時代に転移できるとしても一週間放っておく事で、何らかの悪影響が出る可能性だってある。……つまり、この任務に移るまで時間がないんだ。君達には本当に悪いんだけど、なるべく早く任務へと赴いてほしい」

俺は時計を見た。

午後一時まで、後10分くらいしかなかった。

「——って、言うのが遅いっすよ課長おおお!？」

「ごめん、すまん、ごめん、すまん。今回の件は、私にとっても本
当に急でねえ……」

ただひたすら頭を下げる課長。何だか哀愁を誘うその姿を見て、
俺はこれ以上この人に怒れなくなっただけ。

それにしても、後10分は流石にきつい。いつもならその時代へ
の予習をバッチリ済ませ、作戦もきっちり立てて臨むんだけど……。
今回は、それすらも無理だよなあ。

「……こうなりや仕方ない。行くぞ、マト」

「……分かりました」

覚悟を決めた表情で、先輩が先導する。やっぱり、こういう決断
をズバツとできる先輩を尊敬してしまう。

「——それでは、時空管理局第三課隊員ルッピョロ……行って参り
ます」

「同じくマトリョーシカ、行ってきます！ お土産期待してて下さ
いね」

俺達は、第三課を後にした。

——その後、彼らの姿を見た者は、誰もいなかった……。

……などという、不吉なモノログが一瞬俺の脳裏を掠めたけど、
慌てて首を振ってそれを打ち消したのだった。

|||||

俺のモノログは、的中したのかもしれない。
思えば、嫌な予感で一杯だった。

いつもと違い、色々と準備不足な今回の任務。加えて、火花を飛ばしていた次元転送システム。

俺達の転送時に、ついに暴走しあちこちから煙を出したこのポンコツは、俺達を目標の時代には転移させたものの、不時着という形で大変な被害を与えてくれたのだった。

普段は絶対に起こらない次元流に巻きこまれ、護身用、任務用の装備一式は全部おじゃん。本部との通信機器関連も、あろう事か帰還用の転移プラグまで全て故障してしまった。

今、俺達が持っているもので役に立つものと言えば非常用の携帯食と、インカム式翻訳機だ。これが次元流の影響を逃れたのは、不幸中の幸いだった。翻訳機が無ければ、この時代の人間とコミュニケーションすら取れない。

しかし八方塞がりに近い状態に変わらないので、俺達は頭を抱えていたのだが。

「……行こう、こうしていても仕方がない」

との先輩の決断で、とにかく俺達は誰かと接触を取るべく歩き出したのだった。

次元が違えば時間の流れも違っており、俺達がいた元の次元での一日が、こちらでの一週間に相当する可能性もある。なので、ぼんやり時空管理局の救助を待ち続けるというのは、あまり得策ではない。それよりはこの時代の人間と接触を図り、自分達の居場所を確保しつつ歴史に干渉するのがいいだろうと先輩と話し合った。

今、俺達が歩いているのは自然豊かな森林、それもかなり起伏が激しいのでどこかの山奥なのだろう。先輩からこの次元の説明を受けたが、惑星の環境自体は珍しくもない、炭素系生物を主としたものらしい。言われてみれば、俺達の次元でも見かける植物を発見できた。

「で、戦争状態にあるチョレジオ人とチュケツパミュ人についてだが――」

先輩の説明が、急に止まった。そして、辺りを見回す。

……あ、やだなこの展開。何となくこの先に何が待ち受けてるか、分かってしまった。

「……どうも、俺達の派手な不時着で奴らの注意を引いてしまったらしい。覚悟しろよ、マト。ガン首揃えて、大層なお出迎えときたぞ」

深い木々から覗く、幾対もの双眸。あれって絶対、好意的な目つきじゃないよなあ……。

「――せ、せんばあい。護身用の武器、確か全部壊れちゃいましたよね」

「仕方ないだろう。いざとなれば、徒手空拳で戦え。マーシャルアーツも習っただろうが」

「……とほほ」

ついに雄叫びを上げ、瞳の主達が森林の影から飛び出した！

そいつらの姿は――何て言うか、猿そのものだった。

「……って、猿っ！？　ぎゃあああ！！」

俺達は猿にもみくちやにされる。

必死で抵抗するものの、多勢に無勢だ。これは……かなりマズい。い、嫌だ！

猿に襲われて死ぬなんて、そんな情けない最期は嫌っ！？

「せ、せんばーい！　た、助けてええ……」

先輩に助けを求めたけれど、あっちも大変そうで、俺を助ける余裕は無いように思われた。

「堪えろ、マト！　それから、さっきの説明の続きだが！」

何だっていうんだ、こんな時に？

ふと、注意をそらしたのがまずかった。

俺の手足は何匹もの猿に押さえ込まれ、いつの間にか奴らが用意していた麻縄で器用に縛られてしまった。くっ、こいつら……猿のくせに縄の扱いに長けてやがる！？

そして、そのまま俺は奴らに運ばれ始めた。……自分で言っていて、ちよっと信じられない状況なんだけど。

「せんぱーい!!」

「マトーッ!？」

遠目に見えた先輩は、未だ猿達と悪戦苦闘していた。先輩との距離がどんどん離れてしまう。た、大変だあ……。

そんな俺に、先輩の最後の叫びが聞こえた。

『……いいか、マト! そいつらが、チヨレジョ人だ……!』

——え。

……マジデスカ。

……嘘でしょ?

俺は、俺を抱えて運んでいる数匹の猿達を見た。

……こいつら、どっからどう見ても猿だよね? 凄く動物臭いし。

うち一匹と目が合った。キイツと威嚇された。

「……………」

「……キキッ」

えーと。

こういう時はどうすればいいんだっけ?

……………。

……………。

「帰してー! おうちに帰してええー!? おうちというか今ちよ

つと次元遭難してるけど、それでも解放してくれええー!!」

糞虫のように暴れたけど、当然のように解放してもらえなかった。こうして俺は、訳の分からないままチヨレジョ人なる猿共に拉致

され、ルツピヨロ先輩と離れ離れになってしまったのだった。
……これから、どうなるんだろう。

第一話「俺をいじめて楽しいんですか!?!」 (後書き)

一番時間かかったのがタイトルです (何)

トンデモ短編「立て、ルッピヨロ! お前がやらねば誰がやる!?!」の続きなわけですが。前作の感想レスでしっかり「続編は書かない」と言っておきながら、その宣言を裏切る形になってしまった点は申し訳ないな……と。

でも、こういうサプライズなら許されるといいなと思いつつ。

これからの展開ですが、酷い出来になりそうだぜ……クフウ……! それにしても、マト君って隠れ被虐体質なんでしょうか、びっくりするほど筆が進みました。ごめんよー、マト君ごめんよー。

まだまだボコるよー! (笑)

いやぁ、すっごく楽しいです。

第二話「もうやめて! マトのライフは0よ!」(前書き)

マト「落ち込むことも物凄く一杯あるけれど、俺、この仕事が好きです(自己暗示)」

第二話「もうやめて! マトのライフは0よ!」

チヨレジヨ人……どう見てもお猿さんな彼らに手足を縛られたまま、俺は更なる山奥へと運ばれていった。

ルッピヨロ先輩ともはぐれてしまったし、俺は人知れず彼らの食料となってしまうのだろうか。

そんな事を考えていると、運び手達の移動が止まった。

森林の外れにある大きな崖のあちこちに、いくつもの洞穴がある。そこから、何匹ものチヨレジヨ人が出入りしている様子が窺えた。

成程、ここがチヨレジヨ人の集落らしい。

驚いた事に、俺は今までチヨレジヨ人はただの猿だと思っていたが（無理もないけれど）、奴らはある程度の生活文化を持ち合わせているようだった。

まず、奴らは会話らしき行為をしている。残念ながら今はインカム式翻訳機をつけていないので、会話の内容は分からないけども。

次に、このチヨレジヨ人達は申し訳程度の布切れを身に纏っている。腰周りを覆っているのがオス、腰に加え胸部も覆っているのがメスなのだろう。……うわっ、昔こういう漫画を見た事あるけど、そのまんまだな……。

しかし、俺達を襲ってきたチヨレジヨ人は何も身に付けていなかったぞ? ……裸になるのが奴らの戦闘フォームだとか、そんなのだろうか。

ともあれ、俺は彼らを少し侮っていた。俺が思っていたよりも、彼らは知能を持っているのだろう。

これで会話も通じれば光明が見えてくるんだけど……。

俺を集落に運んだ運び手達は、そのまま俺を地面に転がした。

こっちは動けないんだから、もう少し優しく扱ってもらいたい。

転がされた俺の周りを、興味深そうに何匹ものチヨレジョ人が囲んでいた。

やはり、外見やら何やら色々と違う俺が珍しいのだろう。

見世物の動物って、こんな気分なのだろうか。物凄く居心地が悪い。

ついでに言うと、命の安全も保障されていないので、非常に気味が悪い。

つまり、帰りたい。

「――おうちに帰してええ！」

情けなくも叫んでみたが、周囲がざわついただけで通じた様子もない。

先輩、俺、もう挫けそうっす……。

泣きそうになっていた俺だが、周りのチヨレジョ人が少し退いていく事に気が付いた。その中心には、殊更派手な布（あの程度では服と呼べん）を着たチヨレジョ人がいる。

……そうか、きっとアイツがボス猿……こいつらのリーダーなのだろう。

ボス猿は「ギギイツ！」と辺りの猿達を黙らせ、何事か語り始めた。……生意気に、演説でもしているのだろう。

ある程度何か言っていたボス猿は、不意に俺を見た。

……あれ、もう俺の命はおしまいですか。

これからカニバリズムの始まりですか。

にく うま、ですかァーッ!?

――死にたくねえよおおおうう!!

「い、言っておくが俺はマズいぞ！ 食ったら下痢するんだからな！」

俺の叫びは、虚しく集落にこだましたのみだった。

誰も、何も返しちゃくれない。

……分かってはいたけどね、理解者がいないって悲しいね。

――って、そうだ。俺は彼らと意思疎通を図らないと……! !

「ほ、解いて!? お願いだから縄解いて! 逃げないから、手だけでいいから! インカムが服の中にあるんだよ、頼むよおう!」

体全体を使って、手の縄解けとアピールする。

必死の甲斐あって、ボス猿は俺の意図するところを汲んでくれたようで、部下に命じて手の縄だけは外してくれた。

俺は安心すると共に、こちらの要求を理解する程度の知能はやはりあるんだなあ、と彼らの評価を定めていた。

自由になった手で、俺は服の中にあるインカムを取り出し、装着する。ちなみに、何匹ものチョレジオ人が爛々と目を光らせているので迂闊な事は出来そうになかったし、する気も起きなかった。

インカムをつけた俺は、改めて周囲のチョレジオ人の言葉に耳を済ませた。

「あいつ、変な物を顔にくつつけたぞ? ありや何だ」

「格好悪いよね。センス悪いよ、あの人」

「アタシ、あの男好みじゃないんだけど」

うるさいわ!

……じゃなくて、やった!! 会話が、きちんと聞こえる!

嬉しさの余り、思わず笑みがこぼれてしまった。意思疎通って、本当に素晴らしい。とある神話では神様が人々の言語を別ち、それにより人は争うようになったって聞くけど……本当だなあ!

感激に浸っている俺に、ボス猿が声をかけた。

「気はすんだかね?」

インカムを通じてだと、意外と穏やかな声だった。

「あ、はい。お陰様で」

俺が答えてみせると、ボス猿は少し驚いた顔をした。

それはそうだろう、いきなり俺がお前達の言語を話しているのだから。

しかし相手もさるもの、わずかな逡巡だけで立ち直った。

「我々の言葉が分かるなら、話が早い。ならば、簡潔に用件を伝えよう。今、我々チュレジョ人と、チュケツパミュ人は抗争状態にある。お互い、多くの仲間が死んだ。もはや後には引けぬ。どちらかが滅ぶまで、この戦争は続くだろう。……しかし、悔しい事に、奴らチュケツパミュ人は我々よりも頭が良い。お前もチュケツパミュ人なら、分かるだろう」

「へ？」

俺、何かチュケツパミュ人呼ばわりされたんですが。

「とぼけるでない。その毛の少ない肌、我々よりも歩く事に適した大きな体格、どこを取ってもチュケツパミュ人であろうが」

……成程、つまりチュケツパミュ人は俺達と同じホモ・サピエンスに近い人種なのだろう。話がややこしくなるので、俺はボス猿の言葉を否定しなかった。

「……俺がチュケツパミュ人だとして、何だってんだ」

「我々がチュケツパミュ人に抗するためには、より賢き者が必要だ。目には目を、知恵には知恵を。お前を捕らえたのは、その知恵を頂くためだ」

……ははあ、そういう事だったのか。

こりゃ、図らずも今回の任務と目的が重なったというわけだ。何という好都合だろうか。

「分かった、断る」

だけでも、口を突いたのはこの言葉。

ああ、俺って意外とへそ曲がりなのかもしれない。けれども、言わなきゃ気が済まなかった。

「人様を拉致しておいて、知恵を貸せだなんて都合がいいにも程がある。物を頼むには礼儀つてもんがあるだろう？ それすら知らない野蛮な猿に、教えてやる知識はないね。殺したきゃ殺せよ、それで知識が得られるんならな！」

言ってしまった。感情の赴くまま、言ってしまった。

途端、周囲の温度が下がった気がした。見れば、チヨレジョ人達が殺気立っている。……そりゃ、そうだよなあ。

「ついカッとなって言った、今は反省している」

そう言ったところで、許してもらえない雰囲気ではなかった。

ボス猿はしかし、俺をじっと見据えたまま、ぽつりと言った。

「……この集落の巫女の予言でな、『天より来たりし者』が我らに富をもたらす、というのがある。わしは、その『天より来たりし者』がお前だと踏んだのだが……。もしそうならば、我々は誠心誠意、お前を歓迎しよう。だが、違うというのなら……」

「はい、そうです俺が『天より来たりし者』です」

ボス猿の言葉を最後まで聞く勇氣は無かった。

いや、やっぱりホラ、長い物には巻かれろって言うしね！ さっきの失言が帳消しになるのなら、これくらい安い安い。

俺の言葉を聞き、ボス猿はにんまりと笑った。

「おお、やはりそうか。皆の者、今宵は宴ぞ！『天より来たりし者』が、我らに加勢なさるぞ！これで百人力、につくきチュケツパミユ人どもに仇を討てるというものだ！」

おおう、と盛り上がるチヨレジョ人達。

……本当に良かったんだろうか、これで。

ルッピョロ先輩、今頃何してるんだろうなあ……。

そう思っていると、彼方より幾人かのチヨレジョ人が走ってきた。

「クーゴ様！ 申し訳ありません、『天より来たりし者』の片割れを、チュケツパミユ人に奪われてしまいました！」

「何と！ それはまことか！？」

その報告には、ボス猿だけでなく俺も慌てた。ルッピョロ先輩が、チュケツパミユ人に連れ去られたって事じゃないか！

報告によると、どうもあの後チュケツパミユ人の集団が現れ、彼らによってチヨレジョ人達は敗走したらしい。

つまり、俺達は本当に別れ別れになってしまったんだ……。

先輩、無事でいて下さい……。きつと、助け出しに行きますから

……!

その前に、俺が捕らわれているんだけども。

一方で、クーゴと呼ばれたボス猿も気持ちに整理をつけているようだった。

「……一人でも、『天より来たりし者』を引き入れられた。それで十分としようではないか。うむ」

うむ、じゃねえ。

いずれ、俺はこんなところ飛び出してやる。そして、ルツピヨロ先輩を助けに行くんだ!

仲間達と笑い合うクーゴを見て、いやが上にも俺は決心を固めるのだった。

俺の決心は、早くもボロボロだった。

チヨレジョ人達の住む洞窟の中で、宴に混ぜてもらっていたのだが、ここの酒の旨い事といったらなかった。

並べられた果物はどれも新鮮で、レーションと比べると天と地ほどの差もある。大自然の恵みだろうか、正直彼らの食文化には脱帽したと言ってよい。

「マトリョーシカ様、これもどうぞ」

「こちらの兎は、獲れたてでございます。熱いうちにどうぞ」

「いやー、悪いねえ!」

気付けば俺は、贈呈された食べ物をつまみから平らげ、すっかり祭り上げられていたのだった。人(猿だけど)に貢がせるって、ここまで気持ちの良い事だったなんて知らなかった。

チヨレジョ人達と打ち解けて上機嫌の俺に、クーゴがつついと近寄ってきた。

「マトリョーシカ殿、先の『天より来たりし者』の予言には続きがありません」

「うん?」

「『天より来たりし者』、我らに富をもたらし、巫女と結ばれ一族を繁栄させる……と。おめでとうございます、マトリョーシカ殿は果報者ですぞ」

なんだか くもゆきが あやしくなってきたぞ。

「一族の長であるわしの娘にして、一族で一番の器量良し。女性では最高位の職、巫女を見事に勤め上げながらも、奢らず謙虚で性格も文句の付け所のない——クソンと、結婚できるのですからなあ！」

——はい？

今、なんつった？

「インカムの故障かな……」

俺は現実から逃避しようとした。

そんな俺の背中を、クーゴがばしばしと叩く。

「親の欲目ではなく、クソンは誰もが羨む娘ですじゃ！ 娘を嫁にやるのは寂しいもんですが、相手がマトリョーシカ殿……いえ、親愛を込めてマト殿と呼ばせていただきましょう！ マト殿が相手なら、わしも不満はありません。この場で義父と仰られても、結構ですぞ？」

「え いや ちょっと まって」

「おお、式も挙げずして早計でしたな、こりゃとんだ失礼を！ クソン、クソンを呼べ！」

何か、知らぬ間に話が進んでいる。

これは、すごく、まずい展開なのでは？

ちなみに周りからは、「畜生ー、俺のクソンちゃんがー！」「マトリョーシカ様なら、仕方ないよな……」なんて声が聞こえる。

みんなのアイドルというのは本当らしいが……。

しばらくして、配下の者がやって来た。

「クソン様をお呼び致しました。クソン様も既にご用件を承知の様子で、拳式の準備にぬかりありません」

「おお、流石聡いなわが娘は！ 早速、ここへ！」

俺はこの時、全力で逃げ去るべきだった。

けれど酔いが全身に回っていたし、何よりチヨレジョ人一の美人と謳われるクソンという女性に、少しは興味があつたわけで……。これは、男としての悲しい性みたいなので、責められても仕方がない。

そして、数刻後。

俺は過去の自分を殴り殺したくなった。

「――やっぱり、猿じゃねえかあぁっ！」

チヨレジョ人なりの婚礼用衣装なのだろう、純白の布に何本もの白羽をくっ付けてはいるが。それを着飾っているのは、やはりどう見ても猿。よく見れば毛並みが艶やかだとか肌に張りがあるとか、そんな事はどうでもいい。猿は猿！ 俺の心が動くとかありえない。「もうヤダーッ！ おうちに帰りたいよおおうおおうおおう」

地団駄踏む俺を、クーゴが取り成した。

「マト殿、落ち着いて下され。貴方様は今、酒が回っておられるからあの美を理解できぬのです。気持ちを静め、心の眼で見れば、マト殿もおのずとクソンの良さが分かるはず……」

「分かるわけねえよ！？ 相手は猿だっていうのに！！」

暴れる俺の顔を、突如クーゴががっしり掴んだ。

「そうですか……マト殿は、わしの娘を拒むという事ですか？ ……これは、相当な侮辱ですなあ……。加えて、やはりあなたは『天より来たりし者』でなかったという事に……。したらば、あなたを」

「いやあよく見るとクソンさんって凄い美人ですね俺びっくりしちゃいました！」

クーゴの迫力に、俺はすらすらと屈服の言葉を吐き出していた。
……いや、あの眼はマジで殺る気だった。本当に怖かったんだってば。

「おお、分かっていただけでしたか。そうでしょう、そうでしょうとも！」

先程の威厳が嘘のように、クーゴは快活に笑う。俺も、空笑いしか返せなかった。

一方、俺の言葉を真に受けたクソンは、赤い頬を更に赤らめ、「ふつつか者ですが、どうか末永くよろしくお願いします」と来たもんだ。

勢いに乗った俺達は、そのまま式を挙げてしまった。

だって、下手な事口走ろうものならクーゴが凄い勢いで睨んでくるんだもの……。誰だって、命は惜しい。

ルッピョロ先輩、ごめんなさい。

俺、何かもう色々と失ってしまいました。

——そう思っていた時期が、俺にもありました。

何て言うか、ここからが本当の地獄だなんて思いもしませんでした。

いわゆる、新婚初夜というやつで。

布団は一つ、枕は二つ。

そして目の前には、顔を赤らめたままもじもじしているクソンさん。

……もう死にたい★

冷や汗をリットル単位で流している俺に、クソンが言った。

「……あなた。来て……」

男なら、この台詞を言われて飛びかからぬ輩がどうか、いやいまい。(反語)

——相手が、猿じゃなければなああーっ!?

全身の汗に加え、涙とか嗚咽とか色々な物を垂れ流しながら、俺は下唇を強く噛んで俯いた。

耐えろ、耐えるんだ俺。

ここから先はマジで言い訳できない。

ルッピヨロ先輩にはもちろんだけど、「獣と、やつ・ちゃつ・た経験」が間違いなく俺自身を殺す。羞恥とか悔恨とか羞恥とか羞恥とか。

動かない俺を見て、クソンは表情を曇らせる。

「……やっぱり、私ではご不満なのですね……?」

そんな殊勝な態度で、この俺が心開くはずがない。

「いやそんな事はない、君は魅力的な女性だと思う。けれど俺達はまだお互いの事をよく知らないしそれなのに体の関係を結べないよ」心開くはずなのに……うわあ、凄い。

いつの間にか、彼女を傷つけまいと俺の口はべらべらと喋っていた。

これが男の本能なのかっ!? 本能には逆らえないのかー!?

俺のフォローに、クソンは感涙した。

「……まあ、なんて誠実なお方。貴方様のようなお方を夫に持ち、私は世界一の幸せ者です。……ご安心下さいませ、マト様。これから、私達の時間はたっぷりあるのです。愛もそれと同じ、ゆっくり紡いでいけば良いのです。……今夜の褥は、その橋かけに過ぎない

のでございますよ」

「いやちよつと待ってくれ気持ちは嬉しいが第一俺は初めてで」
なぜか直接的に断れない。クソンのオーラがそうさせるのか、俺
が単に優柔不断なだけなのか。

……あ、あれ。

俺、今、絶体絶命。

「まあ、初めてなのは私もですよ。……ですが、不調法ながら、多
少は殿方の喜ばせ方も心得ております。マト様のお気に召しますか
分かりませんが、誠心誠意ご奉仕させて頂きます」

うふふ、と妖艶に笑うクソン。

ねえ、ちよつと。これマジで洒落にならないんですけど。

い、陰謀だ！ これは誰かの陰謀だあつ！

責任者出て来い！！

「……さあ、マト様。お体を楽になさって」

「アッ——！！」

クソンは笑顔で、俺のベルトに手をかけバックルを

「む？」

森林地帯を抜け、もうすぐチュケツパミュ人の街に着こうかという段になって、ルツピヨロは足を止めた。

「どうしました、ルツピヨロさん？」

声をかけたのは、ルツピヨロを囲む三人のチュケツパミュ人のうちの一人。彼らは、チョレジヨ人に襲われていたルツピヨロを保護し、街まで護衛している最中だった。

「いや、今何か危険が回避されたような気がして……」

「気のせいですよ、ルツピヨロさん。もしかしたら疲れが溜まっているのかもしれないよ？」

男の言葉に、ルツピヨロはかぶりを振った。

「そうかもしれない……。街に着いたら、まず休みたい」

「ご安心を。貴女のような美しい旅人なら、大歓迎です。我々自警団が、責任を持って宿までご案内致しましょう。もしお金にお困りのようでしたら、臨時の働き口を紹介しましょう」

「何から何まで、本当にすまない。ありがとう」

当然の事ですから、と男達は見栄を張る。

多少の下心が見え隠れするが、今更なのでルツピヨロは特に指摘しない。しかし、あの元気な恋人兼後輩ならば……つい、そう思ってしまった。

（マトは今、どうしているだろうか。無事だといいのだが……）

チュケツパミュ人の街で一旦落ち着いたら、機会を見てマトを助けに行こうと決心するルツピヨロであった。

第二話「もうやめて! マトのライフは0よ!」(後書き)

R-18あるいは15?

いいえ、危険は回避されたので問題ありません(笑)
ききは さった。

やっぱり ロクなお話じゃ ないですね。

それにしても、連載小説の更新数って凄いですよねえ。

一時間で10件20件と更新されていく。そんな怒涛の更新数の中、私の作品もざらーっと数に埋もれてしまうのでしょうか、それだからこそ覗いてくれる読者というのはありがたいものですね。

こんなのにかんそうとか おろかなさくしやは よろこびます。

第三話「君がッ 泣いても 殴るのをやめないッ！」（前書き）

質問者「もしドラえもんがいて、好きな道具を一つ貸してもらえら
なら、何を選びますか？」

マト「人生やり直し機（即答）」

第三話「君がッ 泣いても 殴るのをやめないッ！」

「いいか、この警備体制は無駄が多すぎる。なんで巡回ルートがこんなにダブってるんだよ。だからチュツケパミユ人達に簡単に接近されるんだ。あとシフトの人数配置についてだが……」

「——おおっ、流石マトリョーシカ様！ 我々警備隊が長年気付かなかった問題を、いとも簡単に！」

俺は今、チヨレジヨ人達を集めてチュツケパミユ人達と戦うための抗争講座を開いていた。そもそも俺の任務は「チュツケパミユ人相手にチヨレジヨ人を戦争で勝たせる」だからな。任務達成のためにも俺の身の保全のためにも、何も間違った事はしていない。

この時代の文化レベルはC3……発達した武器が剣や弓矢というくらいだから、こいつらを戦争で勝たせるためにはこういう質的向上のための講座は欠かせないのだ。大体、話を聞く限り武器も指示系統もチュツケパミユ人の方が上らしいからな。精々こつちが勝ってるのは、人数くらいか。戦争に負けるわけだ。

未来人の俺から見て、こいつらの警備体制はザルに等しい。まず、戦いにおいて一番重要なのは情報だ。その情報伝達手段が、ものすごくとばしいのだ。

……そんなこいつらに捕まった俺って……。悔しすぎて涙が止まらない。

「おお、マトリョーシカ様が我らの不甲斐なさに涙を流しておられるぞ！ マトリョーシカ様のご期待に応えるためにも、これからは粉骨碎身の思いでチュツケパミユ人どもを返り討ちにしてくれよう！！」

「おお、おお！！ その通りだとも！！」

猿どもは勝手に盛り上がってるし。畜生。

そんな折、ボス猿のクーゴが俺に近付いて、したり顔で話しかけてきた。

「いやあ、順調ですなマト殿。見て下さい、仲間達のやる気に満ち溢れた顔を。皆、あなた様のご高説に胸を打たれた様子ですぞ、流石ですな」

「いやあ、まだまだっスよクーゴさん。見てて下さい、今にチヨレジヨ人の歴史を塗り替えて見せますから」

笑顔で応じる俺。……なんでかな、こいつには頭が上がらない。腐ってもボス猿の威厳がそうさせるのか、それとも単に俺がヘタレなのか。……って、ち、違うぞ！？ 俺はヘタレなんかじゃないぞ！？

「おお、何と頼もしいお言葉！ 流石マト様、『天より来たりし者』！ 期待しておりますぞ。……時に、話は変わりますが」

ニヤニヤ顔のクーゴは、俺に耳打ちしてきた。

「娘のクソンとの初夜は、どうでしたかな？ 差し支えなければ、こっそり教えて下され」

——こ、このクソ親父……それを娘婿の俺に聞かか。

俺の頭に、昨夜の情景が蘇った。

……。

……。

……。

笑顔で俺のベルトのバックルを外そうとするクソン。

その最終防衛ラインに手をかけられ、俺はクソンの肩に手をかけた。

「ちょ、クソン！ ストップストップ！」

「……マト様？」

「お、俺は……」

——俺には、ルッピョロ先輩という恋人がいる。やっぱり、こんな事はできない。

そう言おうと思った。けれど……。

甘い空気が流れたと思ったんだ。思ったんだよ、畜生！ 前言撤回だゴラァー！！

そういや、前に聞いた事がある。猿などの野生動物は、「目を合わせる」Ⅱ「ガチンコバトルの始まりの合図」だって！

「やっぱり、こんなオチかーっ！！」

こうして新婚初夜は一転し、熱い肉弾戦となったのだ。

……。

……………。

……………。

俺は回想から戻ってきた。とりあえず、俺の貞操は守られたんだけど…………。

はつきり言って、クソンは鬼のように強かった。俺は30秒も持たずKO負けして、翌朝まで気絶した。

……あれ、おかしいな。俺、ちゃんと時空管理局で訓練受けたんだけどなあ？

「マト殿、マト殿？ 聞こえておられますか？」

クーゴは俺の返答を急かすし。こっちの気も知らないで。

俺はとりあえず、こいつを刺激しないよう言葉を選んだ。遠い目で。

「ええ、まあ。——刺激的な、夜でしたよ」

別の意味で、色々と。

だがクーゴはそうだろうそうだろうと頷き、満足したようだ。

「クソンに限って、間違いがあるうはずがございませんからな。やはりマト殿は果報者ですじゃ。……ですが、クソンはあれで寂しがり屋ですからな。今晚もご相手をしてもらおうと思っとるかもしれませんぞ」

「な…………！？」

「マト殿もまだお若い。それだけの体力はございますでしょう。い

やあ、若い者は羨ましいのう、ほっほっほ……」

去り行くクーゴを見送る事もなく、俺は驚愕の事実には震えていた。
「今晚も……だと……!?!?」

昨夜はたまたまクソンとのベッドインを避けたが、何度もかわし続ける自信はない。いつか本当にクソンとゴールインしちまう可能性だって、0じゃないんだ。クソンは猿とはいえ、妙な色気もあるしな……。

おおお、恐ろしい……!!

ガタブルする俺に、熱狂が冷めたチヨレジョ人の一人が尋ねてきた。

「……あの、マトリョーシカ様。それで、講義はもうおしまいですか?」

そうだった。今は対チュツケパミュ人用の講義の最中だったんだ。それをクーゴが変に割り込んできたのだ。

……ん、待てよ?

俺の脳内で、稲妻のようにアイデアが閃いた!

「そうだ、そうだよ! これしかない!!」

「え? マトリョーシカ様?」

困惑するチヨレジョ人だが、気にしない。

「いいかお前ら、講義はひとまずこれで終わりだ! 次に実戦訓練に入る! 戦える奴らは全員表に出て、隊列を組め!」

そうなんだよ。俺の仕事……「チヨレジョ人の強化」に励めば、クソンの相手をする体力が残ってない、って言い訳ができる。これは奴らが俺に望む仕事でもあるし、クーゴやクソンだって強くは出れないはずだ。

仕事疲れて妻の相手をできない夫の図ってわけだ。我ながら最高のアイデアだと思う。

こうして俺は、日夜チヨレジョ人達を鍛え続けるのだった。

そして、一週間の時が流れた。

一週間前に比べると、チヨレジョ人のチームワークも見違えるほどマシになった。やっぱり質的向上は大事だな、うん。欲を言えば、よりチュッケパミユ人に対抗するために優秀な武器が欲しい。こっちの道具として石斧や麻縄があるけれど、奴らの剣や弓矢にはどうしても負ける。

生活基盤が技術レベルで負けてるから一朝一夕にはどうにもできないけど、何とかならないものか。

他にも、変えたいところは山ほどある。

まずは食糧調達。チヨレジョ人達は基本、狩猟生活だ。幸い、この辺りは自然が豊かだからそれでまかなっていきけるが、いつか限界は来るだろう。第一、収穫が安定しない。チュッケパミユ人は既に耕地で小麦を育てているという話だから、俺がその技術をこいつらに教えても問題ないだろう。というわけで、農耕のレクチャーも戦闘技術と併して始まった。これが軌道に乗ったら畜産を始めてもいいかもしれないな。

けれど麦を育てるならばそれ用の道具も必要というわけで、道具の開発に乗り出すとまたあちこちで弊害が起こる。何せ、奴らにとっては何もかも1から教えなければならぬ上に、材料すら自分達で見つけなきゃいけない。お前らただけチュッケパミユ人に遅れを取っているんだよ……。

生活基盤の向上にまで乗り出すと、途端に目の回る忙しさとなった。最初はクソンの夜の相手をしないための方便だったが、今では本当にそんな余裕がない。知識の伝道者が俺だけ、っていうのが問題なんだよな。

そう、チヨレジョ人達に一番欠けているもの。それは知識という名の財産だ。

本当に狩猟生活さながらの日々に満足していて、実際にそれで事足りてしまっている。必要は発明の母、というが、奴らにとっては

この大自然が母なのだ。平和な世界ではそれで問題ないだろうが、今こいつらはチュッケパミユ人という文明人達と敵対している。昔のままでは、勝てないのだ。

そしてここでの生活の間に知ったのだが、チヨレジヨ人の寿命は俺達のようなホモ・サピエンスよりもずっと短いらしい。それこそ猿並に。その分、繁殖のスピードも速く個体数も多いわけだが。文明がなかなか発達しないのも、それが絡んでいると思われた。

……ならば、文明の発達と伝道を狙って、学校みたいなものを作りたいな。次々と新しく生まれてくる子供達に最低限の文化のイロハを叩き込めば、チヨレジヨ人の知識の質は向上するし、その中からまた新たに何かしらの発明をする奴が生まれるかもしれない。そうなると誰か教育者が欲しいな。俺がいつまでも教え続けるわけにはいかないだろうし、何より俺は一人しかないんだ。チヨレジヨ人全体を教え導くには、もっと教育者の数が欲しい。

また、巡回ルートのシフトを組んだ時に感じたのだが、チヨレジヨ人は非常に時間にルーズだ。そもそも、時間という概念すらないのかもしれない。考えてみれば、時計すらないもんな。俺は時空管理局の人間だから、どうしてもその辺は敏感になってしまう。

だから俺とこいつらのために、簡素だが日時計を作ってやった。円の中心に棒を立てて、日光の影を時針代わりにするというアレだ。この日時計を元に一日の行動の指針を立てるんだと教えたが、奴らは今ひとつよく分からない顔をした。まあ、初めて時計を目にすりゃそうなるだろう。時計のある生活に慣れるまで、気長に待つさ。

……と、まあ。

俺は本当に、チヨレジヨ人達のために毎日動いていた。

王様というよりは内政大臣のような感じだったが、1から何かを教えるというのも中々楽しい。チヨレジヨ人達も良い生徒で、こっちの言う事を素直に聞いたり、疑問があればそれを口にした。俺は彼らが納得するまで疑問に付き合い、丁寧に説明し続けた。チヨレジヨ人は、知識はないが馬鹿じゃない。誰もが、最後には俺の説明

を理解してくれた。

そんなこんなで、充実した毎日を過ごしていた。

今日はチュツケパミュ人の街の偵察に、奴らの領地の境界線の近くまで足を運んだ。

今まで、奴らに関してはチョレジョ人の口から聞いていたが、やはり自分の目で一度確かめてみたい。そんな動機からだった。

チュツケパミュ人の領地近辺には奴らの見張りがいるという事なので、慎重に俺は護衛のチョレジョ人達と共に歩いていく。今は密林が俺達の身を隠してくれるが、この密林が開けた先からは奴らによって均された大地があるらしい。そうなると弓矢の格好の的だ、気をつけなければ。

そう思っていると、護衛の一人が足を止めた。

「――マトリョーシカ様。近くに、チュツケパミュ人がいます」

チョレジョ人は俺と違って、非常に視覚と聴覚が鋭い。だからこういう密林では役に立つ。

「まだ、奴らの領地に踏み入ってないはずだが。偵察か？……数は？」

「一人のようです」

「……そうか」

一度、チュツケパミュ人達とは話し合ってみたいと思っていた。彼らの生活、思想、そしてチョレジョ人への敵意を確かめたい。相手が一人というのは引くかかるが、これは良い機会だ。

「――麻縄は、持ってきているな」

「はい」

「よし、可能なら捕らえろ。俺も援護する」

「――は！」

俺は護衛達と共に、チュツケパミュ人が見える樹木によじ登った。密林生活に慣れ、彼ら流の登攀術だつて身に付けたのだ。ここからなら相手がよく見えるし、そして向こうからは注目されにくい。人間の意識つて案外、上には向かないものなんだよな。

だが、俺は相手の姿を見て仰天した。なぜなら、その相手は――

「ル……ルツピョロ先輩!？」

何と、先輩はたった一人で俺達の方に向かって来ていたのだ……。

第三話「君がッ 泣いても 殴るのをやめないッ！」（後書き）

普通にシムシティ始めたマトでした。

0から何かを作る作業って楽しいですよね。

目線が合ったら云々のお話ですが、実際に猿と目を合わせたら危険なのでご注意ください。

そういえばポケモンだって、トレーナーと視線合ったら問答無用で戦闘が始まりますよね。奴らは猿と同様の野生を持っているのか。

今回はマト君のイジメ度合いがやや少なくて残念ですね♪

次回はルッピョロ登場でテコ入れできそうな。主にマトいじめに。

マト「やめろオ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9151i/>

立て、マト！お前がやらねば誰かがやるだろうよ！

2010年10月8日14時30分発行